



Title	膀胱癌の臨床的病理学的研究 : 浸潤性膀胱癌の予後 規制因子の検討
Author(s)	黒田, 昌男
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/33641">https://hdl.handle.net/11094/33641</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていない ため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利 用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文につい て <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	くろ 黒	だ 田	まさ 昌	お 男
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	6336	号	
学位授与の日付	昭和59年2月27日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	膀胱癌の臨床的病理学的研究 — 浸潤性膀胱癌の予後規制因子の検討 —			
論文審査委員	(主査)			
	教授 園田 孝夫			
	(副査)			
	教授 北村 旦 教授 森 武貞			

### 論 文 内 容 の 要 旨

#### (目 的)

膀胱癌の病像は多様であり、これに対する治療法も数多く、その選択および予後の推測は困難なことが多い。そしてその治療成績も満足いくものではない。膀胱癌の予後規制因子としては、一般に腫瘍の組織学的異型度と深達度が用いられているが、必ずしも充分ではない。従って膀胱癌の浸潤増殖の特性をふまえたより正確な因子の検索が重要な臨床的課題となっている。そこで著者は、膀胱癌の摘出膀胱について上記二因子に加え、腫瘍の組織型、腫瘍の形態、組織学的浸潤増殖様式、膀胱壁内リンパ管および静脈侵襲など、あらゆる観点より、病理組織学的検索を行い、同時にこれらの因子と予後との関連性についても分析検討を行った。これをもとに、膀胱癌の進展の特性の解明、正確な病期の決定および根治的な治療方針の確立をめざした。

#### (方法ならびに成績)

膀胱癌にて膀胱全摘除術を行った333症例の摘出膀胱を病理組織学的に検討した。摘出膀胱の全層剖面を作成し、hematoxylin - eosin 染色を行い、病理組織学的に組織型、組織学的深達度、組織学的異型度、組織学的浸潤増殖様式、膀胱壁内リンパ管および静脈侵襲について検索し、約100例については、膀胱腫瘍地図を作成して検討した。さらに全症例について予後調査を行い、対比検討した。

1. 組織学的深達度は、pTis + pTa 30例 (10%)、pT1 93例 (30%)、pT2 65例 (21%)、pT3a 53例 (17%)、pT3b 38例 (12%)、pT4 30例 (10%)で、5年相対生存率は、それぞれ106.4%、83.0%、76.4%、40.3%、25.6%、29.1%であった。深達度が高くなるにつれて、予後も悪くなっていたが、pT3bとpT4は逆転しており、これは前立腺への浸潤があれば、膀胱壁の深達度が低く

でも pT4 に分類したためと考えられ、今後の再検討が必要である。

2. 組織学的異型度は、G1 115 例 (37%)、G2 125 例 (40%)、G3 70 例 (23%) で、5 年相対生存率はそれぞれ 73.1%、58.7%、48.4% であった。予後との関連がみられるが、他因子と比べてその相関関係は低い結果であった。

3. 組織学的浸潤増殖様式は、INF  $\alpha$  82 例 (34%)、INF  $\beta$  111 例 (46%)、INF  $r$  50 例 (20%) で、5 年相対生存率はそれぞれ 89.4%、62.4%、34.0% であり、異型度よりも大きく予後に影響しており、優れた予後規制因子であり、臨床応用の重要性を強調したい。

4. 膀胱壁内リンパ管侵襲は、 $1y_0$  95 例 (41%)、 $1y_1$  61 例 (26%)、 $1y_2$  78 例 (33%) で、5 年相対生存率はそれぞれ 84.2%、82.1%、29.4% であり、 $1y_2$  は特に予後を悪くさせる因子であるとわかった。

5. 膀胱壁内静脈侵襲は、V(-) 179 例 (76%)、V(+) 55 例 (24%) で、5 年相対生存率は、それぞれ 74.6%、39.4% であり、静脈侵襲は重要な予後規制因子であるといえる。

6. 各因子間の相互関係も密接であり、一因子での予後不良群に属していれば、他因子でも同様の傾向を示した。

(総括)

膀胱癌の摘出膀胱の病理組織学的検索を行い、腫瘍の組織型、腫瘍の形態、組織学的深達度、組織学的異型度、組織学的浸潤増殖様式、膀胱壁内リンパ管および静脈侵襲が、浸潤性膀胱癌の重要な予後規制因子であることを明らかにした。これら各因子の相互関係をも明らかにし、予後を考慮した初回治療法および補助療法を選択など、根治をめざした治療方針決定における各因子の役割をも明確にした。

なお、これら諸因子の検索は、膀胱癌の診断、治療に際して不可欠であるとともに、その特性の解明にも役立つものであると考える。

## 論文の審査結果の要旨

浸潤性膀胱癌患者 333 例に対し、根治的膀胱全摘除術を施行し、その摘出膀胱について病理組織学的検索を行い、また各症例について予後調査を行い、予後規制因子の検討を行った。その結果、腫瘍の組織学的深達度、浸潤増殖様式、膀胱壁内リンパ管侵襲、膀胱壁内静脈侵襲などが組織学的異型度にも増して重要な予後規制因子であることが明らかとなった。

今後の膀胱癌に対する臨床診断のあり方、さらに初回治療法および補助療法を選択に重要な情報を提供するものとして価値がある。